

「窓」をとおして見えるもの

— 『枕草子』における「窓」用例の語用論的性格 —

高 本 條 治*

要 旨

『枕草子』三巻本に見られる「窓」の用例は、建築構造物としての窓の実体を指示対象とする描写的使用である可能性が高い。一方、仮名文による平安期文学作品に見られる「窓」の他の用例は、その殆どが漢詩文に依拠して解釈的に使用されたものである。したがって、それらと比較する場合、この「枕草子」の「窓」用例は、語用論的に見て独自の性格をもつ用例であるということが出来る。しかしながら、この「窓」用例についても、文脈効果の達成という観点から見ると、解釈的に使用されている点に注意が必要である。

KEY WORDS

解釈的使用 interpretive use
文脈効果 contextual effect

描写的使用 descriptive use
文脈拡張 contextual extension

一 「枕草子」三巻本における「窓」用例

いわゆる三巻本系『枕草子』に次のような章段が見られる。

九月二十日あまりのほど、長谷に詣でて、いとほかなき家にとまりたりしに、いとくるしくて、ただ寝に寝入りぬ。

夜ふけて、月の窓より洩りたりしに、人の臥したりしどもが衣の上に、白うてうつりなどしたりしこそ、いみじうあは

れとおぼえしか。さやうなるをりぞ、人歌よむかし。

長谷寺参詣の場面を描いた段であるが、この中に「窓」という名詞が使用されている。田中重太郎『校本枕草子』によれば、『枕草子』伝本で名詞「窓」が使用されているのは、この一例に限られる。小論は、この章段に使用された「窓」が解釈上いかなる性格を有しているかを、語用論的な観点から考察しようとするもの

である。したがって、『枕草子』の一章段の解釈を採り上げるとはいえ、その文学的研究や文芸的批評をめぐすものではない。

二 平安期和歌資料における「窓」用例

平安期に成立した勅撰和歌集で「窓」が使用されているのは、次に掲げた『後拾遺和歌集』の一例のみである。

文集の蕭蕭暗雨打窓声といふ心をよめる 大式高遠

こひしくは夢にも人をもみるべきを窓うつ雨に目を覚ましつづ

(巻第十七 雑三 一〇一五)

詞書は、この歌が『白氏文集』巻第三・諷論三「新樂府」(其七)「上陽白髮人」に含まれる次の詩句(傍線部)を典故にしていることを述べている。

秋夜長 (秋夜長し)

夜長無寝天不明 (夜長く寝ぬる無くして天明けず)

耿耿残燈背壁影 (耿耿たる残燈壁に背ける影)

蕭蕭暗雨打窓声 (蕭蕭たる暗雨窓を打つ声)

「上陽白髮人」は、楊貴妃が玄宗皇帝の寵愛を独占して後、楊貴妃の妬みを買ひ皇帝の許を退けられて、上陽宮に幽閉された一人の後宮に題材をとる。皇帝の寵愛を期待しつつも、むなしく不遇に一生を過ごした美女の悲話である。

ここに掲げた詩句は『和漢朗詠集』巻上・秋夜に採録され、また『千載佳句』も「耿耿残燈背壁影 蕭蕭暗雨打窓声」の部分を取める。『白氏文集』『和漢朗詠集』等に親しんでいた平安期宮廷人には、「文集の蕭蕭暗雨打窓声といふ心をよめる」という詞書によって、その典故となる「上陽白髮人」の詩句やその解釈成果を

容易に呼び出すことができたはずである。この詞書は、文脈をどのように拡張すればよいのかを示すことで、和歌が適正な(意図された)解釈を受けるように文脈を制御する役割を担っているのである。

近藤春雄は、『奥義抄』が「蕭蕭暗雨打窓声」の解説を行っていることに触れて、「それは『文集の蕭蕭暗雨打窓声といふ心をよめる』というだけでは、何のことだか分からない者がいたからのことであろう」(『白氏文集と国文学』三七五頁)と述べているが、適正な方向に文脈を拡張するためには、求められている百科事典的知識を容易に呼び出すことができるような知的訓練が必要であった。個々の和歌を解釈する上で、文脈をいかに制御し、いかに拡張すればよいのか。このような問題意識が、『奥義抄』のような歌字書が著述される背景にはあったはずである。

このように「窓」は、平安期には勅撰集和歌の素材として詠まれることが極めて少なかったが、『新古今和歌集』に至ると次の四首が収載されている。

五月雨の雲の絶え間をながめつつ窓より西に月を待つかな

(巻第三・夏歌 荒木田氏良 二二三)

窓近き竹の葉すさむ風の音にいと短きうたた寝の夢

(巻第三・夏歌 式子内親王 二五六)

鳥羽にて竹風夜涼といへる心を人々つかうまつりし時

窓近きいささむら竹風吹けば秋におどろく夏の夜の夢

(巻第三・夏歌 春宮権大夫公継 二五七)

法師品、加刀杖瓦石 念仏故応忍の心を

深き夜の窓打つ雨に音せぬはうき世を軒のしのぶなりけり

(巻第二十・釈教歌 寂蓮法師 一九四九)

さらにその後は、『新勅撰集』二首、『続後撰集』一首、『続古今

集』二首、『続拾遺集』四首、『新後撰集』四首と続き、『玉葉集』では十六首が「窓」を使用している。この『玉葉集』の完成時期と同じ十四世紀初頭の成立とされる類題歌集『夫木和歌抄』には、「窓」という部立が設けられている他、「窓」以外の部立に収載された和歌にも「窓」の語を使用したものが少なくなく、総計四十三首におよぶ。このようにして「窓」は、いわゆる「歌ことば」としての地位をしいに獲得していく。

また、西行、寂蓮などには、他の歌人と比べて「窓」の和歌が目立つが、これは、宮廷を離脱した生活をする和歌作者にとって「窓」がそれだけ身近であったことを示唆している。それに対して、平安期の貴族にとって生活の中心であった邸宅や宮殿は寝殿造であり、館は蔀しとよや戸で囲まれ、今日的な意味での窓は通常設けられなかった。

そのような造りでは、蔀も戸も閉じてしまうと外部からの光は遮断されてしまう。『源氏物語』末摘花巻、源氏が末摘花と逢った翌朝の場面がそのことを如実に示す。また、『更級日記』でも、祐子内親王に付き従って参内した折の記事に次のような記述が見られる。

・またの夜も、月のいと明かきに、藤壺の東の戸を押しあけて、さべき人々しつづ月をながむるに（……）

その夜は下に明かして、細殿の遣戸を押しあけて見出だしたれば、暁がたの月のあるかなきかにをかしきを見るに、沓くつの声聞こえて、読経などする人もあり。

蔀を閉めきつた宮廷内の館から月を眺めるためには戸を開ける必要のあったらしいことが推測される。『今昔物語集』巻第二十七・第二十四の「人の妻、死にて後、旧夫に会ふこと」では、久々に昔の妻を訪ねた侍が、すっかり荒れきつた館で共寝をするが、

その際、蔀の上半分を開けたままにしておいたという記述がある。かかる程に暁になりぬれば、共に寝入りぬ。夜の明くらむも知らで寝たる程に、夜も明けて、日も出でにけり。夜前、人もなかりしかば、蔀の本をば立てて、上をば下ろさざりけるに、日のきらきらと差し入りたるに、男うち驚きて見れば、かき抱きて寝たる人は、枯れ枯れと干れて骨と皮とばかりなる死人なりけり。

三 平安期和文資料における「窓」用例

和歌以外の仮名文資料に目を向けても、平安期には「窓」という表現の使用度数自体が少ない。仮名文による日記・物語作品において「窓」が使用された例をしばらく見てみよう。

『和泉式部日記』では、和歌の中に一例「窓」が使用されている。五月の長雨が続くなか、女はわが身の憂さを託つ歌を帥宮に返す。その歌に日頃よりも強い憂愁を感じた帥宮が、翌朝、女にメッセージを伝える場面である。

いたう降り明かしたるつとめて、「こよひの雨の音は、おどろおどろしかりつるを」など、のたまはせられたれば、

よもすがらなにごとをか思ひつる窓打つ雨の音を聞きつつ

「かげにゐながら、あやしきまでなん」ときこえさせられたれば、なほ言ふかひなくはあらずかし、とおぼして、御返り、

われもさぞ思ひやりつる雨の音をさせせるつまなき宿はいかにと

女の歌⑥に使用された「窓打つ雨の音」という表現は、前節に引

いた『白氏文集』「上陽白髮人」の詩句「蕭蕭暗雨打窓声」を呼び出すことを意図したものであることが、(それを呼び出すことが可能な者には)直感されるはずである。その呼び出しが成功するとき、文脈は一定の制御を受けながら拡張され、この歌の解釈は「上陽白髮人」の解釈成果(例えばそこに描かれた情景や情感についての心的表象)と結び付けられることになる。その結果、自分が思いを寄せる貴人から心ならずも遠ざけられた我身の孤独・寂寥を託つ女の心情が、この歌を読む者に強く印象づけられる。つまり、この歌において「窓打つ雨の音」という表現は、「上陽白髮人」の解釈成果を呼び出すという、文脈拡張のための契機となっているわけである。

文脈をより豊かに拡張することは、解釈に三つの恩恵をもたらす。第一は、表現に明示されている内容(表意)の理解が、より肉付けされ具体化されることである。第二は、表現に明示されていない内容(推意)への連想が多様に引き起こされやすくなることである。さらに第三は、十分に肉付けされた表意と、さまざまに想起された推意の束とが総合されることで、相乗的な文脈効果もたらされることである。だからこそ、「上陽白髮人」の解釈成果を呼び出し、それと結び付けて解釈することによって、女の歌に解釈される情景や情感がより具体性や切実性を増すのである。もちろん、漢詩文と結び付けた解釈を行うためには、それ相当の認知資源の消費が必要であるが、そのような特別労力を払うおかげで、それに見合った代償効果が得られるという点が重要である。ただし、「窓」という語が使用されている以上、「窓」によって指示される具体的な事物概念が、この歌の想定世界の中に導入されたとする見方は可能である。これは、「窓」という語が使用されている以上、建築構造物としての「窓」がこの歌にはいくらかは

描写されているという見方である。しかし、「窓」の指示対象を特定することによって、その建築構造物の形状・様式・大きさ・材質などを個別化し具体化することができたとしても、それで得られる文脈効果は、この歌の解釈にとつてそれ程大きくはないであろう。いわば、「窓」の指示対象を特定するために要する余剰労力が、それに見合うだけの代償効果をもたらさしめないものである。それに比べると、「窓打つ雨の音」から「上陽白髮人」の解釈成果を呼び出すことで得られる文脈効果の方が明らかに大きい。

ある表現を、そのとき認知または想定されている世界を具体的に描写するために使用することを「描写的使用」と呼び、それに対して、ある表現を、それと解釈上の類似性をもつ思考内容や解釈成果を想起させる契機として使用することを「解釈的使用」と呼ぶことにしたい。この分類に従えば、『和泉式部日記』における「窓」の使用は、「描写的」であると言うよりも「解釈的」である。前節の『後拾遺和歌集』における「窓」用例についても、「ふ心よめる」という詞書から、解釈的使用であることは明らかである。

次に『源氏物語』における「窓」の使用例を検討する。『源氏物語』には「窓」という語が七例使用されている。まず、用例を列挙するが、()内は引用者による補注である。

a (帚木巻。雨夜の品定めの発端となる頭中将の発言)

「親などたちそひ、もてあがめて、おひさきこもれる窓のうちなるほどは、ただかたかどを聞きつたへて、心をうごかすことあり。」

b (絵合巻。前斎宮(梅壺女御)と弘徽殿女御との絵競争で、

源氏が冷泉帝御前の絵合を提案するにいたって、弘徽殿女

御の父権中納言は負けじと娘を後援する)

(源氏)「いまあらため書かむことは本意なきことなり。ただありけむかぎりこそ」とのたまへど、中納言は人にも見せて、わりなき窓をあけて書かせ給ひけるを、(朱雀)院にも、かかることときかせ給ひて、梅壺に御絵どもたてまつらせ給へり。

c (少女巻。元服した夕霧の字付けの儀が二条院東院で行われ、その式後、列席者たちは夜が明けるまで漢詩を作り、源氏の教育方針によって学問の道に入る夕霧を讃えた) かかる高き家に生まれ給ひて、世界の栄花にのみたはぶれ給ふべき御身をもちて、窓の螢をむつび、枝の雪を馴らし給ふ心ざしのすぐれたる由を、よろづのことによそへなずらへて、心こころに作り集めたる(……)

d (常夏巻。内大臣の君達が六条院に夕霧を訪問した夏の盛りの日の夕暮れ、源氏は君達を付きしたがえて玉鬘の方にわたり、君達の心ざしの深淺を知るよい機会であることを玉鬘にささやき告げる)

「この人々は、みな(君を)思ふ心なきならじ。なほなほしき際をだに、窓のうちなるほどは、程にしたがひてゆかしく思ふべかめるわざなれば(……)」

e (若菜上巻。六条院の蹴鞠の日の夕に女三宮を見た柏木は、せめてもう一度見たいものだと思悶する)

思ひやる方なく、「ふかき窓のうちに、何ばかりのことにつけてか、かく深き心ありけりとだに、知らせてまつるべき」と胸いたく、いぶせければ、小侍従がり、例の、文やり給ふ。

f (若菜下巻。女三宮降嫁以来、物思い心乱れる紫上に対し、源氏は、自分に庇護された暮らしの安心と自らのまご

ころを語る)

「高きまじらひにつけても、心みだれ、人にあらそふ思ひの絶えぬも、やすげなきを、親の窓のうちながら、すぐし給へるやうなる、心やすきことはなし。」

g (幻巻。紫上没後半年が過ぎた五月雨のなか、夕霧が源氏を訪れる場面)

にはかに立ちいづる村雲の気色いとあやにくにて、いとodorおどろしう降りくる雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに(源氏)「窓打つ声」など、めづらしからぬ古ことをうち誦じ給へるも(……)

このうち最後のgの「窓打つ声」は、諸注釈が、既に見た『白氏文集』「上陽白髮人」からの詩句の引用であるとしている。したがって、ここでの「窓」が描写的に使用されていないことは明らかである。感情主体が女性ではなく男性、感情対象が生別の愛人でなく死別の愛人である点で、「上陽白髮人」とは若干の差があるとはいえ、gの場面における源氏の心情と「上陽白髮人」に描かれた女性の心情とは、解釈上の類似性が強く認められる。

また、aの「おひさきこもれる窓のうち」は、諸注釈とも、やはり白楽天の「長恨歌」の詩句「楊家有女初长成 養在深閨人未識」、ないしは、翁卷の「宿寺詩」の詩句「深窓難得月 老屋易生風」に依拠すると指摘している。dの「窓のうちなるほど」、eの「ふかき窓のうち」、fの「親の窓のうち」についても同様である。したがって、a・d・e・fのいずれの用例も、「窓」を描写的に使用しているとは見なせない。

cの「窓の螢をむつび」についても、諸注釈は、『晋書』「車胤伝」に見られる「胤字武子、……恭勤不倦、博学多通。家貧不得油。夏月則練囊盛数十萤火、以照書、以夜繼日。」に依拠してい

ると指摘する。この「窓」も描写的使用であるとは言えない。残ったbの「わりなき窓をあけて」という用例が、『源氏物語』の用例の中では問題である。諸注釈では、次のような解釈が採られている。

- ① 日本古典全書(池田亀鑑) Ⅱ「秘密室を設けて」
 - ② 日本古典文学大系(山岸徳平) Ⅱ「無理な窓を作って(秘密な室を設けて)」
 - ③ 『源氏物語評釈』(玉上琢磨) Ⅱ「秘密の一室を作って」
 - ④ 新潮日本古典集成(石田稔二ほか) Ⅱ「秘密の部屋を用意して」
 - ⑤ 新日本古典文学大系(柳井滋ほか) Ⅱ「苦心して(秘密の)部屋を設けて」
 - ⑥ 日本古典文学全集(秋山虔ほか) Ⅱ「密室の窓を開いて」
 - ⑦ 『源氏物語 現代語訳』(今泉忠義) Ⅱ「窓のない部屋に無理にも窓を作り明けて」
- ①～⑤はいずれも部分(窓)によって全体(部屋)を連想させる提喩(synecdoche)として、「窓」を解している。⑤の新日本古典文学大系では、続けて、「窓をあける」は窓を設けて部屋を作ること」と述べ、『白氏文集』「問居貧活計」の詩句「家を称へて戸牖を開き」を引いている。提喩と見るにしろ、漢詩文に依拠した表現と見るにしろ、この種の解釈による限り、この「窓」は典型的な描写的使用の例ではないということになる。
- ⑥・⑦の注解は曖昧だが、仮に建築構造物としての「窓」が実際に作られたという想定を試してみても、bの絵合巻の場面では、住宅外部に向けての開口部ではない可能性が高い。それだと秘密が漏洩する恐れが逆に高まるからである。
- 館内部の部屋を仕切る壁に設けられた開口部としては、清涼殿

石灰壇の南壁に設けられた「櫛形」が有名である。柱をはさんで開けられた半月形をした横連子窓であり、殿上の間の側から見て左に鬼の間、右に昼の御座が見える。この櫛形は「覗く」ことに利用されたようで、『平治物語』(古活字本)上巻「光頼卿参内の事」の中に、「朝餉のかたに人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ」という光頼の発言が見られ、また、『弁内侍日記』にも「昼の御座の火ども消ちて櫛形よりのぞけば」という記述が見られる。日向進は、櫛形について、「窓の形式を備えてはいるが屋外とは通じず」、「換気、採光という機能はなく」、「それぞれの室を覗き見することを唯一の機能としている」と述べ、「窓といわず、『櫛形の穴』というのはそのせいだろうか」としている(「窓のはなし」一五頁)。確かに櫛形を「窓」と称した用例は見つけられなかった。このことはあくまでも遠い傍証にしかなりえないが、「わりなき窓をあけて」の「窓」が典型的な描写的使用ではないとする見方をいささか強化するものであろう。

「わりなき窓をあけて」の「窓」を典型的な描写的使用であると解する場合の問題点はもう一つある。「わりなき」という修飾語が、「窓」という建築構造物のいかなる属性を取り出して想定させようとしているのか、という問題である。「窓」が描写的に使用されているならば、「わりなき」はその窓が具体的にどのような属性を呈していたのかを描写していると見ざるをえない。しかし、この点に関する整合的な解釈はかなり困難であるように思われる。

桐壺巻には、靱負命婦の弔問を受けた桐壺女御の母君のことばとして、「これもわりなき心の闇になむ」がある。「子ゆえに惑う親心」の不条理を「わりなき」と表現しているのであるが、人目にはばからず過度なまでにわが子へ愛情を傾ける親の姿を第三者的に表現している点で、弘徽殿女御の父権中納言が「わりなき窓を

あけ」たという記述と共通点がある。だとすると、このbの「窓」は、親がわが子を過度なまでに大切に扱うことを含意するa・d・e・fの「窓」用例と同じ発想で使用されたという可能性が出てくる。

いずれにせよ、bの「窓」を単純に、建築構造物としての窓の実体を指示対象とした描写的使用と見なすことは相当難しいようだ。したがって、『源氏物語』における「窓」用例の中には、典型的な描写的使用の例と言いうるものは一つもないということになる。

平安期に仮名文で書かれた、その他の物語・日記における「窓」の用例についても、『源氏物語』に見られた四つのパターンに大別することができる。分類の結果のみ示すと次のようになる。

A 勉強態度の表現……「窓に向ひて光の見ゆる限り読み」、「大学の窓に光はがらかなる朝は」（以上『宇津保物語』）、「年ごろ心を尽しける窓のうちの学問のもと」（『狭衣物語』）

B 養育態度の表現……「なかなかさびしき窓のうちにこもり給へりしほどこそ」（『とりかへばや』）、「ただむすめにては、くだれる窓のうちに忍びて通はむこそいと見苦しかるべけれ」、「ほどなき窓のうちにのみこもりて侍りてんものを」、「げに乳母のふところひとつを限りなき窓のうちに頼みても」（以上『夜の寢覚』）

C 惜別怨慕の表現……「窓打つ雨の音を聞きつつ」（『和泉式部日記』）、「窓打つ雨ももの恐ろしきに」（『狭衣物語』）
D 部屋仕立の表現（但し不審を残す）……「西の対には、大納言殿のおとなしの窓にし給へば、そなたの北の渡殿を

乳母の局にしつらはせ給へり」（『夜の寢覚』）

A～Cは、前述の通り、いずれも漢詩文に依拠して「窓」を解釈的に使用している。また、Dは、なにがしかの疑義が残るものの、比喩的表現として「窓」を使用しているのだと見られる。

四 「枕草子」の「窓」用例を描写的だと解する条件

小論冒頭に掲出した『枕草子』三巻本の長谷寺参詣記事（日本古典文学大系第二百二十九段）に見られる「窓」の用例は、前節末尾に示したA～Dの枠組みには収まりそうにない。もし、この用例が「窓」の典型的な描写的使用であることが明らかであるならば、当然、A～Dの枠組みに収まる必要はない。しかし、『枕草子』の「窓」用例が典型的な描写的使用であると断じるためには、解釈上、どのような条件が満たされればよいのであろうか。

この問題は、「この章段がどの程度まで描写的姿勢で書かれているか？」という問に対する答の見積もり方と密接に関係している。そこで、この章段は作者の経験的事実を描写したものだとする見方について、その信憑性の査定を行っておく必要がある。ここでは、次の四つの間に分解して、検討を進めていく。

- 1 作者清少納言が、実際に長谷寺に参詣したという記述に信憑性があるか。
- 2 その折、「いとほかなき家」に宿泊したという記述に信憑性があるか。
- 3 その夜、「いとくるしくて、ただ寝に寝入りぬ」という状態にあったという記述に信憑性があるか。
- 4 その「いとほかなき家」に月光が「窓」を通して差し込

んでいたという記述に信憑性があるか。

まず1の間について。「卯月のつごもりがたに初瀬に詣でて」の段(百十四段)や「長谷にまうでて局にゐたりしに」の段(一本第二十八段)にも、初瀬参詣の体験が記されている。また、「市は」の段(第十四段)に「椿市」、^{つばいち}「池は」の段(第三十八段)に「贅野の池」のことが述べられている。いずれも初瀬参詣ルート上の名所である。これらから見て、清少納言が実際に何度か長谷寺に参詣したらしいことがわかる。

次に、2の間について。『蜻蛉日記』上巻、最初の初瀬参詣の記事の中に、「今日も寺めぐるところに泊まりて、またの日は椿市といふところに泊まる」という記述がある。寺の宿坊らしき宿を利用したことが知られる。またその帰途の記事には、「いたう暮れぬとて、山城の国久世の三宅といふ所に泊まりぬ。いみじうむつかしけれど、夜に入りぬれば、ただ明くるを待つ」とある。場合によってはかなり居心地の悪い宿も利用しようだ。中巻の二回目の初瀬参詣の記事にも、「宿院のいとむつかしげなるにとどまりぬ」と記されている。

また、『源氏物語』玉鬘巻、筑紫を発し京都に着いた玉鬘ら一行が、豊後介の提案によって初瀬詣で行った際に、「家あるじの法師」が一行に相部屋を強く依頼する場面がある。相部屋を承諾した結果、部屋は詰め込み状態となるが、おかげで玉鬘は右近との再会がかなう。この場面の記述からは、当時の宿坊経営の一端をかいまみることができ、相部屋のようすも知ることが出来る。

『更級日記』の初瀬参詣の記事からも、往路復路の宿泊に苦労があったことがわかる。大嘗会の御禊の早朝、初瀬詣でに出発するのだが、贅野の池のほとりて日が暮れてしまい、仕方なく「いとあやしげなる下衆の小家」に宿をとる。しかもこの宿の主人は

京に御禊見物に行つており、宿には客を客とも思わぬ下賤の男が二人いるだけだった。その翌日、「山辺といふ所の寺」に宿泊し、初瀬に入る。さらに、三日間の参籠を終えての帰路には、「盗人の家」であるかと懸念される「いみじげなる小家」を宿に選んでしまったために、まんじりともできないまま夜を明かしている。なお、二度目の初瀬参詣からの帰路の際には、同行の人数が多かったので「小家」に泊まるわけにもいかず、仮設の庵を宿とし、供の者は野宿をしたという記事がある。

以上のように、長谷寺参詣には、かなり劣悪な宿を利用しなくてはならないという実情があつたようである。したがって、清少納言が「いとほかなき家」に宿泊したという記述も、おそらくは実体験に基づいたものであらうと考えられる。

3の間についても、まず『蜻蛉日記』の記事を見ることにする。二度目の初瀬参詣は悪天候に阻まれた。そのため、「濡れまどふ人多かり。からうじて、まうで着きて、みてぐら奉りて、初瀬さまにおもむく」とか、「からうじて、椿市にいたりて、例のごと、とかくして出で立つほどに、日も暮れはてぬ」とか、「雨や風、なほやまず、火ともしたれど、吹き消ちて、いみじく暗ければ、夢の路の心地して、いとゆゆしく、いかなるにかとまで思ひまどふ。からうじて、祓殿にいたり着きけれど」とかというように、「からうじて」という表現が連発されている。

そもそも神仏祈願のための参詣であるから、身体的苦痛を甘んじて受けるといふ気構えもあつたようである。『源氏物語』玉鬘巻には、「ことさらかちよりと定めたり。ならばぬ心地にいとわびしく苦しけれど、人のいふままにもも思えて歩みおはず」と記されている。女性にとって徒歩による初瀬詣ではかなりの苦痛と疲労を伴うはずであるが、あえてそれを選択しているのである。一日の

行程を終えて宿に到着する時に、疲労が頂点に達していたことは、次のような記述に見てとることができる。

からうじて樅市といふ所に、四日といふ巳の時ばかりに、生ける心地もせて行き着き給へり。歩むともなく、とかくつころひたれど、足も動かれず、わびしければ、せむかたなくて、休み給ふ。

『更級日記』にも、第一回目の初瀬参詣のくだりに、「その夜、山辺といふ所の寺に宿りて、いと苦しけれど、経すこし読みたてまつりて、うちやすみたる」とある。この夜、夢に高貴な女性が現れて、宮中に召される運命だから博士の命婦によく相談せよと告げることになるわけだが、「いと苦しけれど」は、すぐにも就寝してしまいたい肉体的疲労感の表現であると解される。

そうしてみると、『枕草子』の「いとくるしくて、ただ寝に寝入りぬ」という表現も、けっして誇張した表現ではなさそうだと思われてくる。榊原邦彦『枕草子論考』に、『枕草子』において「ただ……」という表現形式が多様で効果的に用いられているという指摘があるが、この段の「ただ寝に寝入りぬ」も、自分でもあきれほど深い眠りに落ちたことを実感をこめて述べているのであろう。

最後に4の間。「いとほかなき家」に月光が「窓」を通して差し込んでいたという記述に信憑性があるか、という問であった。言い換えると、「いとほかなき家」に実際に「窓」がありえたかどうか問題である。

平安期末の制作とされる『年中行事絵巻』を見ると、巻十二の祇園会馬長、稻荷祭の絵、巻十六の毬杖の絵の背景に、京の町屋が描かれている。通りに面した壁の上部に開口部が設けてあり、その扉戸を開けて人々が祭の行列や毬杖の競技を見物している姿

が描かれている。形式としては突き上げ窓であり、今日の感覚で見てもまさに「窓」と呼ぶのがふさわしい。やはり平安期末の制作とされる『信貴山縁起絵巻』にも、信濃の尼が弟の消息を尋ね聞く場面に、同様の町屋が描かれており、やはり突き上げ窓を見ることができるとある。また、稲を干した松の木に並び立つ農家の絵には、竹格子のはまった下地窓（塗りさし窓）が明瞭に描かれている。

このように、庶民クラスの家屋では、突き上げ窓や下地窓が設けることが一般化していたことが推察される。また、宿坊にしても、それが寺院風の家屋であれ、民家風の家屋であれ、何らかの窓が設けてあったと見なすことができるだろう。したがって、清少納言が初瀬参詣の際に利用した「いとほかなき家」にも、実際に「窓」がしつらえてあったと見ることに無理はなさそうである。

以上の検討によって、『枕草子』の「九月二十日あまりのほど長谷に詣でて」の章段は、作者の経験的事実に基づいていると見ることが可能となり、この段はかなり描写的な姿勢で書かれたものであると結論することができる。したがって、この段に使用された「窓」の語用論的な性格についても、建築構造物としての窓の実体を指示対象として、描写的に使用されていると見ることが十分に可能である。だとすると、この『枕草子』の「窓」用例は、これまで検討した他の平安期仮名文学作品の「窓」用例に比べて、独自の語用論的性格をもっていることになる。

五 「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」の解釈

しかしながら、『枕草子』の「窓」用例が、単に描写的に使用さ

れたものだ」と結論づけるのはまだ性急に過ぎるようである。石田稷二『新版枕草子』（角川文庫）は、この段の「窓」に対して、「漢詩から来た言い方であろう」と注を付けている。また、鈴木日出男『枕草子・下』（日本の文学古典編）は、「和文中には例の少ない用語で、漢詩文の影響がうかがえる」と注記している。これらは、この「窓」が解釈的使用と見なしうる可能性を秘めているという指摘であり、前節末尾に記した小論の（暫定的な）結論と矛盾する内容になっている。

このような矛盾が生じてしまうのは、この章段にはまだ検討されなくてはならない解釈上の問題点が残されているからである。それは、この段の最後の一文、「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」の解釈を巡っての問題である。

「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」に対して、諸注釈は次のような現代語訳を与えたり、注記を行ったりしている。

- ① 日本古典文学大系（池田亀鑑ほか）Ⅱ「そのような折こそ人は歌を詠むものだ。」
- ② 『全講枕草子』（池田亀鑑）Ⅱ「そのような時こそ、人は歌を詠むものである。」
- ③ 角川文庫（石田稷二）Ⅱ「そんな時にきつと、人は歌を詠むのだ。」
- ④ 日本古典全書（田中重太郎）Ⅱ「自分は歌ができないがという気持がある。」
- ⑤ 『枕草子評解』（田中重太郎）Ⅱ「こんなおりに、普通の人は歌をよむものである。（わたくしには歌が出来なかったけれど。）」
- ⑥ 『校注枕草子』（田中重太郎）Ⅱ「わたくしにはできないことだがの意が含まれている。」

⑦ 『枕草子評釈』（塩田良平）Ⅱ a 「こんなときにこそ、詩人であれば歌を詠むところである。」、b 「いかにも自分は歌詠みでないように書いているが、彼女自身は歌詠みの意識は薄くても、これらは明らかに歌の心境である。」

⑧ 古典日本文学全集（塩田良平）Ⅱ「こんなときにこそ歌どころでもあれば歌を詠むところだ。」

⑨ 枕草子講座（森本茂）Ⅱ「私みずからは歌がよめないのだが」という含みをもっているとみられる。」

⑩ 『古典評釈 枕草子』（阿部秋生ほか）Ⅱ a 「そのような時に、歌よみだったら一首ものするのだろうけれど……。」、b 「他人だったら、詠むだろうが、自分は歌は不得手なので、こういう文になった、の意か。」

⑪ 完訳日本の古典（松尾聰ほか）Ⅱ a 「そんな時にこそきつと、人は歌を詠むというものだ。」、b 「歌の場を語って歌を記していない。自分は歌は詠まないが、の気持か。」

⑫ 『枕草子全註釈 五』（鈴木弘道ほか）Ⅱ「あえて『人』を挿入していることは、自分を含めているのではなく、歌を詠む能力を持っている人という気持があらう。」

⑬ 『枕草子解環』（萩谷朴）Ⅱ「まるで他人事のように評論して、清少納言自身、ここで和歌を残していないことが面白い。」

⑭ 日本の文学古典編（鈴木日出男）Ⅱ a 「こうした折にこそ、人は歌を詠むもの。」、b 「ここには、歌ならぬ散文によつてその情趣を描きえたという自負がある。」

⑮ 新日本古典文学大系（渡辺実）Ⅱ「そんな時に、人は歌をよむものだ。清少納言が歌をよむことをあまり得意としなかったことを思うと、この言い方は少しおかしい。」

直訳風の訳文だけを記した①～③を除くと、④～⑮はいずれも、この一文と先行する二つの文との整合的な解釈に腐心していることがわかる。④～⑮では、清少納言が和歌詠作を得手とせず、その方面の技量が稚拙であり、適性に不足があったという想定を導入している。また、⑮は、⑤の解釈を前提にした説明であり、ここでも同様の想定が利用されている。整合的な解釈のためには、この文を理解するための文脈を拡張し、この章段には明示されていない想定を新たに持ち込む必要があったわけである。

確かに『枕草子』の中には、和歌を積極的に詠むことに躊躇する自らの様子を描いた段がある(第九十九段「五月の御精進のほど職におはします頃」、第二百三十八段「細殿にびんなき人なん」)。したがって、④～⑮において、清少納言が卓抜した歌詠みではなかったという方向に文脈が拡張されることには、必ずしも根拠がないわけではない。しかし、そのような想定を導入することによって、かえって解釈の整合性が損なわれるとする、⑮のような見方もあることに注意しておく必要がある。

ところで、⑬は「まるで他人事のように評論して」と述べているが、この点は検討を要する。問題は、「人歌よむかし」の「人」の指示対象の中に、作者自身が入るのかどうかという点にある。「まるで他人事のように評論して」と言うとき、それは「自分自身のこと」という理解を前提にしているはずである。しかし、⑭が指摘しているように、自分のことを棚に上げて「人」のことを論評することもできる。

「人」という名詞は極めて一般性の高い語である。したがって、「人」という語が選択され、しかも、それが限定語なしに用いられているということから、ここで何らかの一般化が行われていると見ることがができる。⑤が「人」を「普通の人は」と総称的に解

しているのは、したがって根拠のあることである。ただし、一般化といっても、ここではせいぜい宮廷生活者を中心とする、自分たち本位の一般化にしか過ぎないだろう。例えば、宮廷生活者たる「人」が備え持つ一般の属性として、作詩詠歌の技能というもの仮定するならば、この限りにおいて、「人」は、「詩人」・「歌よみ」・「歌を詠む能力を持つている人」のことであるということになる。これは、⑦・⑩・⑫が明示している、一種の属性化解釈である。

それでは、作者は自分自身を「人」の一員だと見ているのか、そうではないと見ているのか。④～⑮では、個々の確信の度合には差があるものの、作者を「人」の一員から除外する方向での解釈が選びとられている。それらと比べると、⑭の解釈は特徴的で、お決まりの和歌形式で表現する「人」と区別して、自分は散文形式で情趣を描いたのだという「自負」を読み取るうとしている。しかし、何らかの観点で、作者自身を「人」の一員から区別しようとしている点で④～⑮は共通しており、自分自身を、歌を詠む技能を身につけた「人」の一員として解しようとする、解釈の整合性を保ちにくくなってしまおうとする⑮の指摘と軌を一にする。

ここで、「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」という文の統語的構成を見ると、「ぞ」による「さやうなるをり」の取り立て(前景化)に加えて、文末に「かし」を添えている。文末の「かし」については、通常、「念押し」とか「強調」というように捉えられていることからわかるように、この種の助詞が担っているのは、何らかの概念的情報を付け加えるという役割ではなく、命題態度の解釈を一定の方向に制約し動機づける役割であると考えられる。

先程は検討から外した①～③について、いかなる命題態度を解

釈しているかを見てみよう。①は「そのような折こそ人は歌を詠むものだ」というように、「ーものだ」という形式を用いて命題態度の解釈を記録している。②の「歌を詠むものである」も同様である。一方、③は「そんな時にきつと、人は歌を詠むのだ」というように、「きつとーのだ」という形式を用いて解釈の記録を行っている。これらと、⑤で使われた「普通の人は」という表現を合わせると、次のような解釈記録を作ることができる。

・「普通の人は歌を詠むものだ」

・「普通の人はきつと歌を詠むのだ」

このとき、助詞「は」の対比性解釈に支えられて、いくばくかの推意が生じる。それは、例えば次のように示すことができる。

・「普通の人は歌を詠むものだ」（しかし、私は歌を詠まなかつた）

・（私は歌を詠まなかつたのだけれど）「普通の人はきつと歌を詠むのだ」

このような解釈は、まさに⑤が示していたものであり、この推意の内容は④・⑥などにも示されていた。また、⑦aでは「詩人であれば」、⑧では「歌ごころでもあれば」、⑩aでは「歌よみだつたら」という仮定条件表現を加えることで、「私」が歌を詠まなかつたという推意がより導かれやすくなるようにしている。この⑦a・⑧・⑩aは、実は、さらに一歩先に進めた推論の結果を取り込んでいることになる。その推論を仮に問の形で示せば次のようになる。

・普通の人は歌を詠むものなのに、なぜ私は歌を詠まなかつたのか？

この問に対する答は、⑦aならば「私は詩人でないから」、⑧ならば「私に歌ごころがないから」、⑩aならば「私は歌よみではな

いから」ということになる。さらに、⑩bの「自分は歌は不得手なので」も、この問に対する答になっている。前述したように、「枕草子」の他の章段に、積極的な和歌詠作を憚るような記述が見られる以上、このような方向で文脈を拡張することには、かなり有力な根拠があると言える。しかし、「歌才がないから私は歌を詠まなかつた」という解釈よりも、より高い文脈効果を達成することのできるような解釈の可能性はないのであろうか。

再び、「人」の指示対象の特定の問題に立ち返ることにしたい。もし、「人」が自分自身を含まない、排他的な指示を行っていると思えば、「私は歌を詠まなかつた」という推意の内容はさらに強化されることになる。しかし、「人」の指示対象の中に自分自身も含まれるという包含的な解釈も、依然として可能性としては否定されない。この点について、「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」という表現は、何ら決定的ではないと言える。だとするならば、「私は歌を詠まなかつた」という推意もまた決定的であるとは言うことができず、不確定性を帯びた一つの解釈候補でしかないことになる。

その不確定性を取り除くには、どうすればよいであろうか。もし、「人歌よむかし」と言い切った当の本人が面前にいるならば、聞き手は次のような言い方で問い返すことができる。

・それじゃ、あなたは歌を詠んだの、それとも詠まなかつたの？

・あなたも歌を詠んだのかしら？

野村精一は「枕草子の文体」（『枕草子講座』一）の中で、「定子下問―清女即答すなわち『問ふ―答ふ』という構造の上に、枕草子の言語世界が構築されている」と述べている（二二三頁）。この枠組みを適用して、『枕草子』という作品に即した、一つの文脈拓

張を行うならば、ここで作者に問い返す役割を担う蓋然性が高いのは、中宮定子だということになる。

しからは、定子が発するかもしれないこの種の問に対して、『枕草子』の作者清少納言はどのように答えるであろうか。また、どのように答えたとしたら、いかにも『枕草子』らしく、また、清少納言らしいであろうか。ここでは、『枕草子』らしき、清少納言らしきに関して、次のような指摘を利用してみることにしよう。

・枕草子に描かれる作者の自画像が、一種の道化ぶりであることに異論はなからう。西郷信綱によれば、それは歴史的状况の中で自己の分裂を余儀なくされた「悲劇的喜劇役者」であり、阿部秋生によれば、父元輔ゆずりの「人咲ハスルヲ役トスル」あり方であり、塚原鉄雄によれば、「サーカスの猿」を演じていたとさえ評される。(三田村雅子『枕草子―表現の論理』九五頁)

・恐らく清少納言は、人との応接に臨んだ時に、最もよくものが見えるのであろう。いままでの経緯、相手がしかけた言葉の含み、返すべき言葉の方向、利用すべき詩文や和歌、そういったものの一切が、瞬時に整頓されるのではあるまいか。

それは、いま自分がしようとする応対が、どういう意味を持ち或いは持つべきものがすっかりつかめている、ということに他ならない。そうした応対ぶりを文章に再現しようとする時、意味がつかめているから文章がしまつて来る、ということではあるまいか。(渡辺実『平安朝文章史』一四六頁)

『枕草子』らしきや清少納言らしきを、前者は「道化ぶり」に、後者は「応対ぶり」に求めていることがわかる。このような一定の解釈成果に基づいた想定が呼び出し可能だと仮定すると、ここで指摘されている「道化ぶり」と「応対ぶり」の両面を満足させ

る解釈が可能であったならば、その解釈は少なくとも、これらの想定を強化することによって文脈効果を生じることになる。

「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」の後に続けて、定子の問い返しを想定したり、さらに、それに対する作者自身の返答を想定したりすることによって、この章段の解釈に「応対ぶり」という側面を持ち込むことができる。このとき、例えば、次のような返答を想定してみよう。

・そりや、歌を詠むにはまさに絶好の機会ですもの。もちろん、詠む気はありましたわ。でも、詠めなかったの。

「歌を詠むにはまさに絶好の機会ですもの」というのは、「さやうなるをりぞ」の「ぞ」と、「人歌よむかし」の「かし」とを契機としてもたらされる推意をこのように表現した。「詠む気はあったわ」は、通常ならば自分も、歌を詠む「普通の人」の一員であるはずだ、一員であるべきだ、という認識を清少納言がもっていた蓋然性が高いと考えてこのように表現した。また、「でも、読めなかったの」には、この章段から読み取ることのできる一種の機知、すなわち「道化ぶり」の側面を表現したつもりである。では、この章段に読み取ることができる機知とは何か。

「詠む気はあったのに詠めなかった」という答は、
・じゃあ、なぜ、詠む気があったのに、詠めなかったの？

という、一歩先に進めた問い返しを誘発する。この問に対する答として、先行の注釈書では、清少納言の詠歌能力の欠如、あるいは欠如の自覚というところに結び付けた解釈が多く採択されてきたわけである。むろん、それも一つの「道化ぶり」ではあろうが、この章段の先行表現との連携性や一貫性が十分に満たされないという、解釈上の欠陥があった。

それに対して、この、「なぜ、詠む気があったのに、詠めなかつ

たの？」という問に対する答のヒントは、この章段の明示的表現の中に周到に準備されていると見ることもできる。「ただ寝に寝入りぬ」という、開けっ広げでユーモラスとも言える表現が、それである。この深い眠りは、「いとくるしくて」という原因によってもたらされたものであった。参詣の旅の途上にある者の激しい疲労が、それほどすぐに回復するとは思えない。一時的には目を覚ましたとしても、再び眠りに落ちたとみなす方が常識的ではないか。「なぜ、詠む気があったのに、詠めなかったの？」という問に対する答は、

・疲れがひどかったのですもの。だから、また眠ってしまったの。

というような内容になるのが自然である。

この解釈が、先行表現に明示された内容との整合性（連携性や一貫性）を保証してくれるという利点は大きい。その点から見ても、

A 私は歌を詠めなかった。また深い眠りに落ちてしまったから。

という推意を想定することによって達成される効果の方が、

B 私は歌を詠めなかった。もともと歌を詠む才能がないから。という推意を想定することによって達成される効果よりも、相対的に大きいと言える。Aは、参詣の旅に疲れ切っていたという既存の想定を強化するとともに、いかに詩的情緒にあふれた場にあっても肉体的疲労には勝てないという新規の想定を、既存の想定に付け加えてくれ、その結果、この章段全体の解釈上の整合性が保証されるのである。

とはいえ、もちろん、Aの想定に続けてBの想定を付け足すことは差し支えない。次のCがその例である。

C 私は歌を詠めなかった。また深い眠りに落ちてしまったから。もちろん、もともと歌を詠む才能もないんだけどね。

しかし、このCにおいて、Bに相当する後半部分の推意は、あくまでも随意的に付け加えられたという程度のものでしかない点に、すなわち、弱い推意であるという点に注意が必要である。

以上、「枕草子」らしき、清少納言らしきが、「道化ぶり」や「応対ぶり」の卓拔さという点に求められると仮定して、「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」の解釈を、文脈効果という観点から検討してきた。その結果、従来の注釈が採択した解釈とは異なった見方が可能であることが明らかになった。これもまた、文脈拡張のしかたが解釈そのものに及ぼす影響の具体的事例である。

六 「枕草子」の「窓」用例を解釈的だと解する可能性

再び、「九月二十日あまりのほど」の章段で使用されている「窓」が、描写的使用か、解釈的使用かという問題に立ち返ろう。目下のところ、この「窓」は、平安期仮名文学作品の用例としては珍しく、典型的な描写的使用の例だと見ることができ、というところまで論を進めてきている。しかし、描写的使用だからといって、必ずしも解釈的には一切使用されていないと言い切ることはできない。この節では、「枕草子」の「窓」用例を解釈的に使用されたものだと見ることのできる可能性がないかどうかを検討する。

前述の通り、この「窓」に関して、石田稷二は「漢詩から来た言い方であろう」と述べ、鈴木日出男は「漢詩文の影響がうかがえる」という指摘を行っていた。しかし、どのような詩句が想起されるのかというところまで具体的には言及されていない。清少

納言が典拠とした漢詩文の詩句を指摘した目加田さくを・古沢未知男・矢作武・木越隆の対照リストにも採り上げられていない。

そこでひとまずこの問題は後回しにして、家の中にさしこむ月光という観点から突破口を探ってみよう。この段では、「窓」を通して、「いとほかなき家」に月光が漏れ入ってきた。月光について、「すべて、月かげは、いかなるところにてもあはれなり」(二本第二十七段)と賞美する作者だが、粗末な家屋にさしこむ月光については、「枕草子」の中で他に二度言及している。

・似げなきもの。下種げの家に、雪の降りたる。また、月のさし入りたるも、口惜し。(第四十五段)

・荒れたる家の、蓬深く、葎むらはひたる庭に、月の隈なく明く、澄み昇りて見ゆる。また、さやうの荒れたる板間より洩り来る月。荒うはあらぬ風の音。(一本二十六段)

このような、荒れた家にさしこむ月光については、『伊勢物語』第四段の次の一節が思い出される。

またの年の睦月に、梅の花盛りに、去年を恋ひて行きて、立ちて見、ゐて見れど、去年に似るべくもあらず。うち泣きて、あばらなる板敷に月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひ出でてよめる。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして

とよみて、夜のほのぼのと明くるに、泣く泣く帰りにけり。

また、『和漢朗詠集』巻下の「故宮付破宅」には、次の和歌が収められている。

君なくて荒れたるやどの板間より月のもるにも袖はぬれけり
同じく『和漢朗詠集』巻下の「閑居」には、張誥の「閑賦」からとして、次の詩句を収載している。この詩句は「窓」が使用さ

れている点でも注目される。

幽思不窮 (幽思窮まらず)

深巷無人之処 (深巷に人無き処)

愁腸欲斷 (愁腸断えなむとす)

閑窓有月之時 (閑窓に月の有る時)

『伊勢物語』や『和漢朗詠集』の例では、さしこむ月光と深い憂愁の情とが絡みあっている。特に『伊勢』の例では、悲愁が尽きぬまま歌を詠み、やがて夜明けを迎える。それに対して、先に引用した『枕草子』の二例では、「下種の家」に「月のさし入りたる」情景も、「荒れたる板間より洩り来る月」も、どちらかといえば、純粹に美的鑑賞の対象という観点から問題にされていた。

このあたりで漢詩文に目を向けてみよう。清少納言が『文選』を愛読していたらしいことは、「ふみは、文集。文選。新賦。史記。五帝本紀。願文。表。博士の申し文」(第二百一段)という章段から知られるが、『文選』の中には、明月と憂愁悲嘆の情とを結び付けた詩に、一定の特徴的な表現をもつものがある。その表現に傍線を付して次に列挙する。

・『文選』巻第二十六「行旅上」の陸士衡「赴洛道中作 二首」(其二)の末尾

清露墜素輝 (清露には素輝の墜ち)

名月一何朗 (名月は一に何ぞ朗かなる)

撫枕不能寢 (枕を撫して寝ぬる能はず)

振衣独長想 (衣を振ひて独り長く想ふ)

・『文選』巻第二十七「樂府上」の「傷歌行」の冒頭

昭昭素明月 (昭昭たる素明の月)

暉光燭我牀 (暉光我が牀を燭らす)

憂人不能寢 (憂人寝ぬる能はず)

耿耿夜何長（耿耿として夜何ぞ長き）

・「文選」卷第二十九「雜詩上」の「古詩十九首」（其十九）の

冒頭

明月何皎皎（明月何ぞ皎皎たる）

照我羅牀幃（我が羅の牀幃を照らす）

憂愁不能寢（憂愁して寝ぬる能はず）

攪衣起徘徊（衣を攪りて起ちて徘徊す）

いずれも「不能寢」（寝ぬる能はず）という表現を含む。明月に照らされた夜は物思いゆえに眠ることができないという発想である。

同様の発想は、「白氏文集」や「本朝文粹」の漢詩にも見られる。

両者とも、「南窓」「戸牖」という、「窓」を示す表現を使用している点でも注目される。

・「白氏文集」卷第九「秋月」

夜初色蒼然（夜初めて色蒼然）

夜深光浩然（夜深けて光浩然たり）

稍軛西廊下（稍西廊の下に軛り）

漸滿南窓前（漸く南窓の前に満つ）

（中略）

棲禽尚不穩（棲禽すら尚穩かならず）

愁人安可眠（愁人安んぞ眠る可き）

・「本朝文粹」卷第一「橘存列「秋夜感懷」（部分）

夜深雲翳尽（夜深て雲翳尽き）

秋月懸清虚（秋月清虚に懸かる）

金波浮戸牖（金波戸牖に浮かび）

銀漢映溝渠（銀漢溝渠に映ゆ）

（中略）

愁人冷不睡（愁人冷しくして睡られず）

中夜起躊躇（中夜に起きて躊躇す）

躊躇明月下（躊躇す明月の下）

明月独照余（明月独り余を照らす）

これらの詩句に共通しているのは、明月の夜には、憂愁とそれゆえの不眠とが詩歌を生むという発想構図である。明月の夜ではないけれども、平安期仮名文学作品における「窓」用例の重要な典拠の一つである、前掲の『白氏文集』「上陽白髮人」の詩句も、「不眠」と「窓」が結びつけられている点で類似している。次に再掲する。

秋夜長（秋夜長し）

夜長無寢天不明（夜長く寝ぬる無くして天明けず）

耿耿残燈背壁影（耿耿たる残燈壁に背ける影）

蕭蕭暗雨打窓声（蕭蕭たる暗雨窓を打つ声）

また、同じく『白氏文集』の次の詩句にも、「窓」の明月と「不眠」とを結びつける発想が見られる。

・「白氏文集」卷第十五「燕子楼三首」（其一）

滿窓明月滿簾霜（滿窓の明月滿簾の霜）

被冷燈殘臥臥牀（被冷やかに燈残して臥牀を払ふ）

燕子楼中霜月夜（燕子楼中霜月の夜）

秋来只為一人長（秋来只一人の為に長し）

前節では、「九月二十日あまりのほど」の段の末尾の一文「さやうなるをりぞ、人歌よむかし」を、先行表現と整合的に解釈し、しかも高い文脈効果を達成するには、どのような解釈が採られる可能性があるかを検討した。そして、旅の疲労からくる眠りが、新たな解釈の鍵になるという見方を述べた。文脈効果の達成には、既にある想定を排除し却下する場合も含まれる。秋の夜、明月に

照らされた情景のもとでは「眠れないのが普通だ」「眠らないで詩歌をなすのが普通だ」という想定が既に呼び出されていたなら、疲労のせいで眠気に勝てなかったという想定はそれを破棄することになる。新たな文脈効果が生まれるわけである。

この点に注目すると、この章段の「夜ふけて、月の窓より洩りたりしに云々」の記事を、単純に描写であると割り切ってしまうことに、ためらいが感じられてしまう。「窓」とおして秋の月光が差し込んでくるという設定は、「いみじうあはれ」なる深夜の情景であり、通常ならば「人」の作詩詠歌の心を駆り立てるはずのものである。しかし、作詩詠歌が十分に行われるためには、少なくとも眠りから十分に覚めている必要がある。この想定は、「明月—憂愁—不眠—詩作」という発想の構図として、清少納言も愛好したとおぼしき『白氏文集』『文選』『和漢朗詠集』などに収められた漢詩文に対する解釈成果としても呼び出しうる可能性がある。だとすれば、この章段における「窓」は、単に描写的であるにとどまらず、解釈的に使用されているとする見方も可能になってくる。

以上、小論では、『枕草子』三巻本の「窓」用例は、まずは描写的使用であると認められるものの、その一方で、解釈的使用であると認められる可能性もあるということについて、くどくどしく述べ回してきた。小論で注意を向けたかったのは、「窓」という小さな名詞一つをとってみても、それを契機として得られる解釈には、解釈者側の文脈拡張によって左右される不確定性が伴っているという点である。そこに、解釈の可能性と優先度とのせめぎ合いがある。小論で「窓」とおして直接見ることができた問題は小さく狭い範囲に局限されたものでしかないが、それは、より大きく広い語用論的な問題に必ずや通じているはずである。

注

1 小論における日本古典作品の引用は、特に注記しない限り、日本古典文学大系の校訂本文に拠る。引用に際し、仮名遣い、漢字の宛て方、句読法などは読みやすさを考慮して改めた箇所がある。「九月二十日あまりのほど」の段は、日本古典文学大系では第二百二十九段であるが、日本古典集成・新日本古典文学大系では第二百一十一段、日本古典全書・角川文庫（新版）では第二百一十四段とされており、それ以外の説もある。本段は能因本、前田本、堺本には見られず、田中重太郎『校本枕草子』では三巻本系統逸文の第九段とする。

2 『万葉集』では次の一首にのみ「窓」が使用されている。

窓こしに月おし照りてあしびきの風吹く夜は君をしぞ思ふ

窓超尔月臨照而足檜乃下風吹夜者公乎之其念

（巻第十一「寄物陳思」二二六七九〇新二六八七）

3 統国訳漢文大系『白樂天詩集』の本文・訓読に拠った（同書底本の詩題は「上陽人」）。なお、同書の用字では「窓」ではなく「牕」となっているが、『和漢朗詠集』所収本文との対応を考慮して「窓」という用字で掲出した。

4 西行の『山家集』には「窓」を使用した和歌が七首ある。また、『夫木和歌抄』に収められた和歌で「窓」を使用したもののうち、五首が寂蓮の作で最も多く、次いで慈鎮の四首、西行、信実らが三首という順となる。

5 窓の変遷や様式変化については、日向進「窓のはなし」、神代雄一郎『日本建築の美』、山口廣「目でみる住まいの歴史」を参照した。それらによれば、正倉院文書の記録によって復元図が作成された藤原豊成邸板敷には、細木を並べた「連子窓」（櫺子とも）が二カ所設けられていたというから、奈良時代の貴族邸宅は「窓」と多少とも縁

があったようである。なお、中国渡来の建築様式を取り入れた寺院では、法隆寺西院伽藍や発掘された飛鳥山田寺回廊などに見られるような連子窓が、平安期にも引き続き設えられていた。

6 この歌は「和泉式部集」にも、「おほ雨のあした、よひはいかがと宮よりある、御返事」という詞書を添えて収載されている。

7 この段落に述べているような解釈過程の捉え方は、Sperber and Wilson (1986a) が提唱する「関連性理論」の枠組みに拠っている。「関連性 (relevance)」とは、文脈効果と処理努力によって相対的に決定される概念であり、文脈効果が大きいほど関連性は大きく、また、必要な処理努力が多いほど関連性は小さくなる。

文脈効果 (contextual effect) は大きく三種に分けられ、発話に明示された内容が、(1)「既に存在する想定 (assumption)」を強化する場合、(2)「既に存在する想定を排除し却下する場合」、(3)「既に存在する想定に新たな想定を付け加える場合」、のいずれかであるとき、文脈効果をもつ。(3)の「新たな想定」は、文脈含意 (contextual implication) もしくは推意 (implicature) と呼ばれ、発話に明示された内容 (表意 explicature) だけからも得られず、また、聞き手が利用可能な文脈だけでも得られないが、表意を文脈の中で処理すると得られるような想定のことである。

関連性理論の主張は、「すべての意図明示的 (ostensive) な伝達は、自ら最適関連性 (optimal relevance) の見込みを伝える」というものであり、これが「関連性の原理」と呼ばれる。さらにこの原理から二つの帰結が導かれる。第一は、「最適関連性との整合性を有するという基準を最初に満足した解釈が、その基準を満足する唯一の解釈であり、それが聞き手が選択すべき解釈である」というもの、第二は、「同じ想定を得るのに、より多くの処理努力を必要とする解釈からは、そうでない解釈に比べて、特別努力を代償するだけの文脈効果が得られなくてはならない」というものである。

なお、Sperber and Wilson (1995) による部分的な改訂によって、

上記の原理は、「関連性の第二原理」(もしくは「伝達的原理」として位置づけ直されている)。

8 言語使用に、描写的次元 (descriptive dimension) と解釈的次元 (interpretive dimension) の区別があるという見方については、Sperber and Wilson (1986a) の考へ方に基づいている (第四章七節参照)。Sperber and Wilson (1995) は両者の区別を次のようにまとめている。「ある発話を解釈して得られた思考が、ある事態の真なる描写として心にいだかれるとき、その発話は描写的に使用されている。ある発話を解釈して得られた思考が、そこから一歩進めた何らかの思考 (例えば、他に帰すべき思考や関連のある思考) に対する解釈として心にいだかれるとき、その発話は解釈的に使用されている。」(二五九頁)。

9 「徒然草」第三十三段にも、「閑院殿の櫛形の穴は、まろく、ふちもなくぞありし」という玄輝門院の言葉が引用されている。いわゆる里内裏にも櫛形が設けられていたことがわかる。

10 日本古典文学大系は「おとなしの窓」に、「音をたてず、ひそやかな部屋の間。赤子をかくしておく場所だからである」という頭注を与えている。

11 以下、「枕草子」の段数は、日本古典文学大系のものである。

12 「正月に寺にこもりたるは」の段は、三卷本(百二十段)では参籠先を「清水」としているが、能因本の対応章段では「初瀬」としている。能因本に従えばこの段も長谷寺参詣の記事となる。

13 「枕冊子全註釈 五」では、「漢詩から来た言い方であろう」と述べることも、一応はうなずけるものではある」とはしながらも、注2に記した「万葉集」の「窓ごしに月おし照りて」の歌や、『今昔物語集』の「窓」用例については「漢詩の影響もないようであり」と述べ、「この例もあえて漢詩文を考えなくてもよきそうにも思えるのである」と結論している。ただし、「窓ごしに」の歌については、「臨照」という漢語を熟字として「おしてる」と訓ませている点に、漢詩の影

響がないと言いつけることへの聊かの躊躇を覚える。なお、『今昔物語集』において、「窓」は巻第七第三十と巻第二十第三十九に使用されている。前者は「震旦」の「鐵ノ城」を舞台にした話で、大陸風建築における「窓」が描かれている。後者は「清瀧河ノ奥ノ聖人」が水をくむのに「水瓶」を飛ばす話で、人里離れた「庵」における「窓」が描かれている。

14 ただし、釈信阿の『倭漢朗詠集私注』では、『白氏文集』の「貧女賦」であると注している。

15 『更級日記』にも、粗末な家屋にさしこむ月光が、深い悲しさと結び付いた記述が見られる。一つは、出産をひかえた乳母と仮設の小屋めいた所で別れる場面の、「いと手放ちに、あらあらしげにて、苦といふものを一重うち葺きたれば、月残りなくさし入りたるに」という箇所であり、もう一つは、仮住まいでの出産後に亡くなった姉の遺児を見守る場面の、「形見にとまりたる幼き人々を左右に臥せたるに、荒れたる板屋のひまより月の洩り来て、児の顔にあたりたるが、いとゆゆしくおぼゆれば」という箇所である。

16 『文選』からの引用は、いずれも新釈漢文大系『文選（詩篇）下』の本文・訓読に拠った。

17 続国訳漢文大系『白楽天詩集』に拠った。

参 考 文 献

- 阿部秋生・野村精一 『枕草子 古典評釈』 右文書院 一九八〇年
池田亀鑑 『全講枕草子』 至文堂 一九七三年
池田亀鑑・岸上慎二 『枕草子』 『枕草子 紫式部日記』（日本古典文学大系） 岩波書店 一九五八年
石田稷二 『新版枕草子』（上下、角川文庫） 角川書店 一九七九～八

○年

木越 隆 『枕草子の源泉—日本漢詩文—』 『枕草子講座』四 有精堂

一九七六年

神代雄一郎 『日本建築の美』 井上書院 一九七五年

近藤春雄 『白氏文集と国文学 新楽府・秦中吟の研究』 明治書院

一九九〇年

柳原邦彦 『枕草子論考』 教育出版センター 一九八四年

塩田良平 『枕草子評釈』 学生社 一九五五年

塩田良平（訳）『枕草子』 『枕草子 方丈記 徒然草』（古典日本文学全集） 筑摩書房 一九六二年

澁澤敬三（編）『新版 絵巻物による日本常民生活絵引』（一～五） 平凡社 一九八四年

鈴木日出男 『枕草子』（上下、日本の文学古典編） ほるぷ出版 一九八七年

田中重太郎 『枕冊子』（日本古典全書） 朝日新聞社 一九四七年

田中重太郎 『校本枕冊子』（上・下・附巻、総索引第I・II部） 古典文庫 一九五三～七四年

田中重太郎 『枕草子評解（改稿増補版）』 有精堂 一九五九年

田中重太郎 『枕冊子全註釈』（一～四） 角川書店 一九七二～八三年

田中重太郎 『校注枕冊子』 笠間書院 一九七五年

田中重太郎・鈴木弘道・中西健治 『枕冊子全註釈』（五） 角川書店 一九九五年

野村精一 『枕草子の文体—その説話性について—』 『枕草子講座』（二） 有精堂 一九七五年

萩谷 朴 『枕草子』（上下、日本古典集成） 新潮社 一九七七年

萩谷 朴 『枕草子解環』（一～五） 同朋舎 一九八一～三年

日向 進 『物語ものの建築史 窓のはなし』（山田幸一監修） 鹿島出版会 一九八八年

古沢未知男 『漢詩文引用より見た源氏物語』 桜楓社 一九六四年

(1/2).

前 久夫 『古建築のみかた図典』 東京美術 一九八〇年
 松尾 聰・永井和子 『枕草子』(一・二、完訳日本の古典) 小学館
 一九八四年

(一九九六年四月三〇日受理)

二〇

- 松田豊子 『清少納言の獨創表現』 風間書房 一九八三年
 三田村雅子 『枕草子 表現の論理』 有精堂 一九九五年
 目加田さくを 『清少納言の漢才』 『平安文学研究』 一九五五年
 森本 茂 『枕草子鑑賞(第二―二九段)』 『枕草子講座』
 (三) 有精堂 一九七五年
 柳井 滋(ほか) 『源氏物語』(一、四、新日本古典文学大系) 岩波書
 店 一九九三―六年
 矢作 武 『枕草子の源泉―中国文学』 『枕草子講座』(四) 有精堂
 一九七六年
 山口 廣 『目でみる住まいの歴史』 井上書院 一九八四年
 渡辺 実 『平安朝文章史』 東京大学出版会 一九八一年
 渡辺 実 『枕草子』(新日本古典文学大系) 岩波書店 一九九一年
 Blakemore, Diane. 1992. *Understanding Utterances: An introduction
 to pragmatics*. Blackwell. [武内道子(ほか訳)『ひとは発話と
 う理解するか』(ほか)書房'一九九四年']
 Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986a. *Relevance: Communica-
 tion and cognition*. Blackwell. [内田聖一(ほか訳)『関連性理論
 ―伝達と認知』研究社出版'一九九三年']
 Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1986b. 'Loose talk'. *Proceedings of
 the Aristotelian Society* 86.
 Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1995. 'Postface'. In *Relevance:
 Communication and cognition*. 2nd Edition. Blackwell.
 Wilson, Deirdre. 1994. 'Relevance and understanding'. In G. Brown,
 K. Malinckær, A. Pollit and J. Williams (eds.), *Language and
 Understanding*. Oxford University Press.
 Wilson, Deirdre and Dan Sperber. 1992. 'On verbal irony'. *Lingua* 87

What We Can See through the Window. A Pragmatic Characteristic of the Use of *Mado* in *Makurano-soshi*.

Joji TAKAMOTO*

ABSTRACT

There are good grounds for acknowledging that the use of Japanese word *mado* ('window') in *Makurano-soshi* actually refers to a substantial entity of some window structure of those days' building. In contrast with this, by investigating appearances of this word within the literature works which was written in *Heian* period using *kana*-writing system, we can find that almost all other uses of this word are interpretively used with some implications of Chinese lyric poems. Therefore, in comparison with these, the use of *mado* in *Makurano-soshi* has a very unique pragmatic characteristic. However, we still have to notice that there may be extra possibility of another way of understanding. From the viewpoint of contextual effects achievement, we can consider this use of *mado* as one which is not only descriptively used, but also interpretively used.